

カツオ・マグロ資源漁場調査事業(概要)

海洋資源科 田ノ本 明彦

1 背景

本県主要漁業の一つである近海カツオ竿釣漁業はまき網船の参入等により厳しい経営が続いており、効率的な漁場探索による経費の節減が求められている。また、高度回遊性魚類についての国際管理機関が設立されようとしており、カツオ・マグロ類の科学的データの充実が急務となっている。

2 目的

海洋開発調査船土佐丸により漁期前、漁期中のカツオ・マグロ漁場調査(試験操業等)を行い、その情報を迅速に当業船に提供することにより、操業効率のアップを図る。また、資源評価のための基礎データを収集する。

3 内容

カツオ資源漁場調査として南方海域から伊豆、常磐、三陸沖へと北上するカツオ魚群を追跡しながら漁場探索をおこない、操業結果、魚群の性状、魚体、水温等を1日4回船間無線により当業船に情報提供をおこなった。併せて、1日3回の海洋観測を実施し、海況情報についての情報提供をおこなった。

また、資源生物調査として魚体測定、胃内容物調査、カツオ移動分散状況・成長等把握のための標識放流調査をおこなった。

マグロ資源漁場調査として、四国南方海域において海洋観測及び試験操業を実施し、マグロ漁場形成要因解明のための基礎資料を収集した。

4 結果

カツオ漁場調査

平成14年カツオ漁期における漁場調査は、2月5日に第1次航海に向け宇佐港を出航し、3～6月に計8航海を実施し情報提供を行った。航海日数は87日間であった。

また、7月及び9～10月の調査は独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所の用船調査として

44日間実施し、情報提供と併せて2,227尾のカツオ標識放流(体長測定後ダート型標識2本装着)と111尾のメモリー型標識による放流を行った。

マグロ漁場調査

10、11月に四国沖マグロ漁場においてマグロ漁場形成要因としての海況構造を把握するための海洋観測及びマグロ延縄試験操業を11日間実施した。

(各航海ごとの調査結果は平成14年土佐丸調査報告書に記載。)